

主
は、主 生きておられる

Unser HERR lebt

2018
graph magazine vol. 49

Unser
HERR
lebt

Unser
HERR
lebt
主
は、主 生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3・3)

vol. 49 定価100円(税込み)

メッセージ

- 4 信仰生活の成長 ゴットホルド・ベック
15 神との平和 高村昌彦
19 神様から受ける大きな愛の慰め 重田定義

7人の証し

- 27 ^すべてを統べ治められる主イエス様 野田洋子
36 私たちの主イエス・キリスト 高田英彦
47 主の御恵み——主は祈りに答えてくださる 高幣信彦
58 愛されています 秦野裕子
64 ^{かた}くな私の心の戸をも叩き続けてくださった主 海老根敦
76 主こそ私の受ける分です 海老根純子
85 すべてイエス様の御計画の中で 富田晃

信仰生活の成長

ゴットホルド・ベック

また言われた。「神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。地は人手によらず実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実がいります。実が熟すると、人はすぐにかまを入れます。収穫の時が来たからです。」
(マルコ 4:26-29)

きょうは、キリスト者の「信仰生活の成長」について、一緒に考えてみたいと思います。はじめに読んだマルコによる福音書4章26節には「神の国は、人が地に種を蒔くようなもので」とあって、主を信じ新生したいのちの生涯の始まりが書かれています。そして次の「夜

は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます」という27節は、新生したいのちの成長について書かれています。

肉体の誕生は、人生の始まりにすぎません。誕生すれば必ず成長がそれに続きます。同様に、霊的な誕生も信仰生活の始まりの第一歩にすぎません。新しく生まれた信仰者は、生まれたときのままで止まることなく、信仰の従順に至るまで成長しなければなりません。イエス様の歩まれた御後(みあと)に従って歩む人生、これこそが、新しく生まれることの目的に他なりません。

信仰の成長について、このみことばから三つの法則を見ることができないでしょうか。第一に、一歩一歩、成長すること。第二に、自ずから成長するこ

と。第三に、目に見えないものに目を留めて成長するということです。ここで、これら三つの事がらについて短く考えてみたいと思います。

徐々に成長する

まず第一に、新しいのちは、徐々に成長します。28節を見ると「初めに」、「次に」、「次に」と書いてあります。これは、霊的な成長が順を追って遂げられることを意味しているのではないのでしょうか。信仰の成長には時が必要です。この段階的な成長について、聖書は他の多くの箇所でも語っています。まず、コリント人への手紙第二の3章18節を見てみましょう。

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のようになにの栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

(2コリント 3:18)

信仰生活の成長

ここで「栄光から栄光へ」ということは、成長が徐々に、順々に進むことを示しているのではないのでしょうか。もう一箇所、ペテロの手紙第二の1章4節を読みます。

あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。
(2ペテロ 1:4)

このみことばは現在形で書かれており、そのことから霊的な成長が一挙に遂げられるのではなく、段階的に行われるということを知ることができます。新しいのちの成長のためには時間が必要です。ですから私たちは、お互い兄弟姉妹同士、忍耐をもって、相手の霊的な成長を祈りながら待つことを学ばなければなりません。

自ずから成長する

新しいいのちは、徐々に成長すると同時に、自ずから育ちます。始めにお読みしたマルコによる福音書4章28節を見ると、「地は人手によらず実をならせる」とあります。ですから種を蒔く人は、種を蒔き終わったら家に帰って眠ってしまっても、別に構わないのです。種蒔きは種を蒔きます。種蒔きの仕事はそれで終わりです。新しいいのちは自ずと成長します。

イエス様は、ご自身がこの地上で公に活動される期間がたった三年間しかないということをもろろんご存知でした。それでもイエス様は、焦ったり先走ったりすることなく、平安と喜びに満たされ、地上での仕事を成し遂げてくださいました。イエス様は、蒔かれたみことばの種は、その時が来れば必ず実を結ぶことを確かにご存知だったのです。この主イエス様の態度は、私たちが忍耐を欠いて、先走ったり、焦って物事を行ったりしがちな時に、教訓を与えてくれることでしょう。

イエス様は、いつでも私たちに信仰による平安をお与えになりたいと思っておられます。主のみことばは、私たちが自分の努力や熱意では決して獲得することのできない、永遠に残る御霊の実を結ばせてくださいます。主イエス様は、私たちがこのことに信頼して、いつも喜びに満ちて、収穫の時を待ち望むことを願っておられるのです。

私たちの信仰生活において、次の二つの側面は両者とも極めて大切なことではないでしょうか。まず、私たちが忠実に、熱心に主に仕えること。そして、主のくださる平安と喜びをもって主をじっと見つめ、主が業を成してくださるまで忍耐強く待つことです。

この二つのどちらが欠けても、健全な信仰生活とは言えません。間違った熱心さは、信仰の平安を奪い、自分からは何もしないという無気力な態度は、主の働きを妨げてしまいます。主に喜んで心から熱心に仕えつつ、魂の平安を心のなかに持つことです。この調和のとれた

信仰生活こそ、私たちに必要とされています。ヘブル人への手紙の著者は次のように書いています。

神は正しい方であつて、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。

そこで、私たちは、あなたがたひとりひとりが、同じ熱心さを示して、最後まで、私たちの希望について十分な確信を持ち続けてくれるように切望します。

それは、あなたがたがなまけずに、信仰と忍耐によって約束のものを相続するあの人たちに、ならう者となるためです。

(ヘブル 6:10-12)

「正しい熱心さ」は「信仰による魂の平安」を伴います。この両面は、私たちがある人を主のもとに導こうとする時にも必要です。このことを特に、まだ救われていないご主人やご家族をお持ちの兄弟姉妹方に覚えてい

ただきたいと思えます。新生のいのちは、生涯を通して段階的に成長します。またそれは、人の力ではなく、主の力によって自ずと成長していくものです。

見えないものに目を留めて成長する

信仰の成長には三つの法則があります。一番目、徐々に成長するということです。二番目に、主の力によって自ずから成長するということ、三番目に、目に見えないものに目を留めて成長するということです。

新生のいのちは、最初の頃は目に見えるものが何もなくても、いずれ必ず実を結ぶようになります。28節にこのことが約束されています。「初めに苗、次に穂、次に穂の中に実がいります」と。良い種が良い地に落ちるならば、時が来て実を結ぶようになることは議論の余地がありません。これと同じように、新しいいのちは、いつか必ず実を結ぶようになります。けれども、そのためには、人は忍耐強く待たなければなりません。このことは信仰生活において、ある意味で極めて大き

な試練だと言えます。

新しく生まれた信者は、ちょうど生まれたばかりの赤ん坊にたとえることができます。ペテロは、第一の手紙2章2節に次のように書いています。

生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。
(1ペテロ 2:2)

人が生まれた目的は、いつまでも人に面倒を見てもらう赤ん坊の状態に留まることではありません。同じように、新生のいのちの目的は、みことばの乳によって成長し、大人になることです。パウロは「完全なおとな」という表現を使いました。エペソ人への手紙4章13節に次のように書いてあります。

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリスト

悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。
(2コリント 2:4)

というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。しかし、蛇が悪巧みによつてエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔^{ていけつ}を失うことがあつてはと、私は心配しています。

(2コリント 11:2-3)

パウロは、心から兄弟姉妹のことを心配し、正直に告白したのです。パウロの心の痛みはいかばかりだったことでしょうか。「だれかが弱くて、私が弱くない、ということがあるでしょうか。だれかがつまずいていて、私の心が激しく痛まないでおられましょうか」(2コリント 11:

信仰生活の成長

の満ち満ちた身たけにまで達するためです。

(エペソ 4:13)

完全なおとなに成長するためには、忍耐の上にも忍耐が必要なのです。確かにパウロは、祈りによって、信じる者の成長のために闘いました。ローマ人への手紙1章11節を見ると、彼は次のように告白しています。

私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです。
(ローマ 1:11)

これはパウロの切なる祈り、また願いでした。同じくパウロは、コリントにいる兄弟姉妹たちにも次のように書き送ったのです。

私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを

29)と書き送っています。

また、ガラテヤ地方にいる兄弟姉妹たちにも、パウロは自分の苦しい心の内を打ち明けています。

私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。
(ガラテヤ 4:19)

パウロは本当に信じる者の成長のために祈り、闘い続けたのです。コロサイにいる人々にもこのように書き送っています。

あなたがたとラオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。

(コロサイ 2:1)

信仰生活の結実

ここまで信仰生活の成長について考えてきました。信仰生活は、目に見えないものに目を留めることによって成長していきます。パウロだけではなく、ヨハネも同じように考えていたのではないのでしょうか。ヨハネの手紙第一の3章2節を見ると、次のように書かれています。

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。(1ヨハネ 3:2)

「キリストに似た者となること」、これこそ私たちの信仰の結実、また目的に他なりません。

最後にこの信仰生活の結果について、ちょっとだけ一緒に考えてみたいと思います。

収穫の時には、種がどのように成長したかすべてが

が、主が祝福してくださるかどうかが、主が私たちをお用いになることができるかどうか、また主が私たちの祈りを聞き届けることができるようになるかどうかは、ひとえに私たちの心の態度にかかっています。

私たちの心の願いが、主が御栄光をお受けになつてくださることであり、主の御心を行うことであるなら、主は私たちの祈りをお聞き届けにすることができます。ところが、私たちが愚かにも、自分勝手な歩みをし、自分の願いを祈るなら、主はその祈りをお聞き届けになることができません。なぜなら、主の私たちに望んでおられる最善の事柄は、私たちが「主ご自身に似た者となる」ことだからです。

では、私たちの内にキリストが形造られるためには何が必要でしょうか。一つには、試練を通ることです。二つ目には、忍耐を持って待つことです。三つ目に、目に見えないものに目を留めることです。

イエス様は、私たちのために試練と苦難を経て十字架に架かり命を捨ててくださいました。イエス様は、

信仰生活の成長

明らかにあります。イエス様を受け入れた人は誰でも信者ですが、信者の中には様々な人がいます。信じる者は、主のみことばによって新しく造り変えられ、永遠のいのちを持っています。しかし、このような事柄を満たしている信者であっても、その土台の上に何をもって自分の信仰を打ち建てるかによって、違いが出てきます。つまり、金や銀や宝石で建てる信者もいれば、木や草や藁で建てる信者もいます。前者に属する信者は、神から報いを必ず受けますが、後者に属する信者は、主から「実」を受けることができません。(1コリント 3:12-15)

私たちの心の状態が、この事を決定します。もし、信者であって、自分自身の事柄をまず第一にし、主よりも仕事を先に立て、集会の兄弟姉妹のことを思うよりも自分の家族を大切にし、聖書に親しむよりもテレビを愛するという信者であるならば、主から報いを受けることはもちろん無理です。

主は私たちを祝福したいと思っておられます。です

小さな一粒の種として死なれましたけれども、このことによって主は多くの実を生み出されました。多くの実とは、イエス様のみからだなる教会であり、主の恵みによって救われた兄弟姉妹たちです。十字架の死から二千年の間、その「種」は成長し続けました。

今、刈り入れの時が近づいています。実が熟するためには、日照りが必要です。収穫の前にはその日照りが最も強くなります。「日照り」は、成長に必要な苦難や試練を意味することばです。試練の時にこそ、私たちは主を待ち望み、主の来たりたもうことが間近に迫っていることを知るべきです。試練は信じる者にとつては最も大きな祝福です。なぜなら、その試練を通して主イエス様をより良く知ることができるからです。

コリント人への手紙第二の4章17節後半を読みましよう。たった一文ですが、当時の信仰者たちの成長の秘訣を非常によく表すことばではないでしょうか。

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。

(2コリント 4:17)

パウロは、ご承知のように本当に多くの苦難を受けました。けれども、そのパウロがここで、その試練を「軽い患難」と言っています。どのような試練であろうとも、来るべき栄光に比較するなら、それは取るに足らないものに思えるのです。ところで、ここで言う「重い永遠の栄光」とは、いったい誰に向かって語られているのでしょうか。

その答えは18節に書かれています。それは、「見えるものではなく、見えないものに目を留める」私たちに對して用意されているのです。

私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。(2コリント 4:18)

目に見えるものとは、自分自身の弱点や欠点であり、救われていない家族の状態であり、主を否定する友人たちです。それらに目を留めることなく、目に見えないものに目を留めるよう聖書は励ましています。信仰の父と呼ばれるアブラハムは、目に見えないものに目を留めて歩んだ男でした。彼については、ローマ人への手紙の中で次のように書かれています。

このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。(ローマ 4:17-18)

これは非常にすばらしい約束です。その前の16節にはこう書いてあります。「世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こう

して約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。『わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした。』と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです。」

主は私たちに一体何を望んでおられるのでしょうか。その答えはエペソ人への手紙に出ています。

私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するためです。(エペソ 4:13)

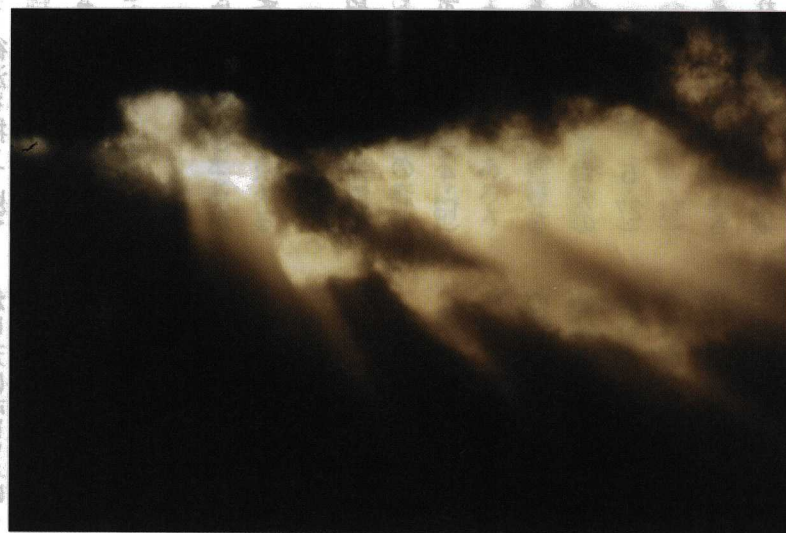
ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。(エペソ 5:27)

この主のご目的が達成されるなら、信じる者は生き続けているまま、一瞬にしてその置かれた苦難や試練の場

から天に引き上げられます。よく引用されますが、私たちが念頭に置くべき聖書箇所が次のところです。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。(1テサロニケ 4:16-17)

いつまでも主とともにいること、これこそが私たちの願いであり、喜びであり、希望です。初代教会の兄弟姉妹たちが、互いに持っていた心からの願いは、「主イエスよ。来てください」(黙示 22:20)という祈りでした。これが、私たちにとっても同じように切なる願いであれば、本当に感謝だと思っています。



神との平和

高村 昌彦

信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。

(ローマ 5:1-2)

信仰義認

二〇一七年は、マルティン・ルターによって始まった、いわゆる宗教改革から五百年の節目に当たります。マルティン・ルターが一五一七年十月三十一日、ウィッテンベルグ城の教会の門扉に「九十五か条の提題」を掲げたのは、当時の教会が、人は罪を犯しても

「免罪符」なるものを購入すれば、罪は免じられると教えていたからです。ルターはこれに異を唱え、「九十五か条の提題」を掲げたのですが、結果的には教会から破門されることになりました。しかし、このルターの行動が、プロテスタント誕生の契機となったことはよく知られているところです。ルターは実に聖書をよく読み、また暗記したと言われていますが、彼が特に強調したのが「信仰義認、聖書のみ、万人祭司」の三つでした。中でも「信仰義認」は、ルターの行動のきっかけとなったものであり、今日も私たちの信仰の重要な土台であると言っても過言ではないと思います。

冒頭に引用したローマ人への手紙五章一節―二節の

神との平和

書き出しは、「信仰によって義と認められた私たち」ということばで始まっていますが、私たちが義と認められ救われたのは信仰によりました。それ以外に何もありませんでした。では、その信仰とはどういうものなのでしょうか。何を信じるのでしょうか。コリント人への手紙第二のみことばが、これを説明しています。

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。
(2コリント 5:21)

つまり主なる神は、罪を知らない方、御子イエス様に私たちの罪のすべてを負わせ、私たちの罪をあがなうためのいけにえとされました。神様は、このことを受け入れ、信じた人は義である、罪はすべて赦され、正しいものであるとみなされました。パウロは、これが神様によって義と認められる信仰の内容だと言っているのです。すなわち、「信仰義認」です。

が、大きなあわれみをもって、あなたを集める。怒りがあふれて、ほんのしばらく、わたしの顔をあなたから隠したが、永遠に変わらぬ愛をもって、あなたをあわれむ。」とあなたを贖^{あがな}う主は仰せられる。
(イザヤ 54:7-8)

主はご自分に背くものを、「ほんのしばらくの間」見捨て、「ほんのしばらく」御顔を隠されましたが、私たちに対する愛は永遠に変わらず、私たちが永遠にあわれむといっておられるのです。主はお怒りになりますが、その怒りは私たちを地獄に突き落とすためのものではありません。罪に対する怒りです。その主の怒りと主の愛が交差したところに、イエス・キリストの十字架は立てられたのではないのでしょうか。主は私たちとの平和な関係を損なうことなど、決してなさいません。それどころか、弱い私たちを助け、守り、支え、天の御国まで導いてくださいます。そのことについて、ローマ人への手紙のみことばを軸に、以下に見ていきたいと

神との平和

このようにして、私たちは義なるものと認められましたが、それは同時に、主なる神に受け入れられたということの意味します。神様に受け入れられたということは、神様との平和な関係に入ったということです。私たち人間は、夫婦関係、親子関係、友人関係、上司と部下の関係等々、様々な関係の中で生きていますが、これらの関係はいつも良好に保たれているとは限りません。お互いの間にいろいろな打算が働いたり、様々な感情に支配されたり、根も葉もないうわさに翻弄^{はんろう}されたりして、これらの関係が崩壊することも決して少なくありません。しかし神様との平和な関係は、私たちの方でこれを壊そうとしない限り、決して崩れることはないのです。なぜなら、この関係は主なる神が一方的につくられたものだからです。イザヤ書には、主がご自分が選ばれたものに対して、どのように関わってくださるかが語られています。

「わたしはほんのしばらくの間、あなたを見捨てた

思っています。

平安

永遠の神、愛の神と平和な関係に入った人は、おのずから平安に満たされることになります。おのずから平安に満たされるのは、この平安の起源が私たちにないからです。すなわち、この平安は主が与えてくださったものだからです。イエス様は弟子たちに次のように告げられました。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。
(ヨハネ 14:27)

ここでイエス様は、私が与える平安は、世が与える平安とは異なると言っておられます。世が与える平安

とは、たとえばエレミヤ書に書かれているような平安です。

彼らは、わたしの民の傷を手軽にいやし、平安がないのに、『平安だ、平安だ。』と言っている。

(エレミヤ 6・14)

偽預言者は罪の深刻さを語らず、根拠のない口先だけの平安を語るの、結果的に人々の目を真理からそらすことになります。従って、事が起きればその平安は化けの皮がはがされ、他愛もなく消え去りますが、それだけではなく、これに頼っていたものを奈落の底に突き落とすことになります。世が与える平安とはこのようなものではないでしょうか。しかし一方、イエス様が与えて下さる平安は、救われた喜びから湧き上がる平安です。ペテロはその手紙の中で、次のように書いています。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、榮えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

(1ペテロ 1・8～9)

高村昌彦(近江八幡キリスト集会)



神様から受ける大きな愛の慰め

重田 定義

私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。神は、どのような苦しみときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。それは、私たちにキリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによってあふれているからです。

(2コリント 1・3～5)

今日は、神様から受ける慰めとはどういうものなのかということについて、私の父の人生に起こったできごとから、皆さまとごいっしょに考えてみたいと思います。

神様から受ける大きな愛の慰め

ます。

私の父は二十二年前に八十八歳で天に召されたのですが、父の遺品の整理をしていたときに、文箱の底から一通の茶いろに変色した古い手紙が出てきました。それはノート紙の表と裏にペンで書かれていて、当時、旧制一高の同級生だった平山清さんという友人から送られたものであることがわかりました。そのときの父は、両親を相次いで失っていました。四十五歳の父親が直腸がんで亡くなり、その直後に母親が、自分自身をふくめ六人の子どもを残したまま交通事故で亡くなってしまったのです。

なぜ父がこの手紙を一生涯大切に持っていたのかと

いう疑問は、読んでみてすぐに解けました。その手紙の一節をここにそのままご紹介したいと思います。

「親愛なる重田君

この度の貴君のご不幸に対し、私はいかにして貴君をお慰めしてよいかわかりません。もし、この不幸が私の身にふりかかって来たら、私は実にどんなでしょう。その時の覚悟が出来ていなければいけないかもしれませんが、私には出来ていません。私はそんなことを考えるだけでも恐ろしい。そのような仮定をするに忍びないからです。そのような私ですから、ただもう貴君がお気の毒で、お気の毒でしかたがないばかりで、さて、どうしたらよいのかわかりません。ただ私は神のご啓示により、貴君および貴君のご弟妹（父には四人の弟、一人の妹がありました）をば、ただ神がその全能なる御力と無限の愛とによって、良きようにしてくださいるように祈るのが、私の今としては最善の

策なることを知りました。これからは日に三度は必ずそれを神に祈ります。そして神が一刻も早く、それを聞き入れてくださるように、私の行動をば、ますます神の御心に逆らわぬように致します。実際、その場になったら、私のごとき信仰の薄き者はどうなるか、それはわかりませんが、やはり、かかる際に、人にもっとも強き慰めと新しき希望を与えるものは、神の愛と正義とに対する信仰と、確固たる来世観に勝るものはないと思います。人は、病むとか、死すとかいう境遇にたいしてはだれでも絶対服従であり、靈魂のみは自由独立で、何者にも束縛されないというようなことを、この頃有名なラッセルという人が言ったそうですが、今のようなときは、まったく靈魂について考えるべきだと思います。私は今、まことに僅少ながら、この冬休みに働いて得たる報酬の残額をもって、本（聖書）を買って差し上げたいと思います。まことに貴君のご不幸を慰めるためには、何事でも

したいのです。重田君、重田君、どうか私のごとき

つまらぬ人間の微志を受けてください。私は貴君が仏教に帰依せらるることを知っております。しかるに今、キリスト教の本を差し上げるのは、貴君のお心に背くことになりますから、私もそれははなはだ心苦しいのです。けれども、内村（鑑三）先生も「キリスト教は仏教と比較にならぬほど尊い」というようなことをば明言しておられるようですから、貴君のお考えは存じませんが、私としてこの際、最善にして、かつ貴君および私自身に対して最も忠実と思うことを断行いたします。重田君、少なくとも私の微志をお汲み取りください。」

そして、手紙の終わりにには詩篇四十六篇から、次のみことばが書かれていました。

神はわが力、わが高きやぐら、
苦しめるときの近き助けなり。

神様から受ける大きな愛の慰め

たとい地は変わり、山は海原の中に移るとも、
われいかに恐れん。

（詩篇46：1、2）

私自身は、平山清さんという方には、一度もお目にかかったことはありません。しかし、この方が父にはじめてイエス様の福音を伝えてくださり、この手紙がきっかけとなって、父がイエス様を救い主と信じる信仰に導かれるようになったのではなく、やがてずっと後になって、息子である私とその妻、娘、そして母や父の弟妹たちにも主イエス様の恵みがおよぶに至ったこと、またこれからも、さらにこの福音の恵みが多くの人々におよぶであらうとことに思い至ったとき、この一通の手紙を通して神様のなされたみわざの大きき、深さに心を打たれ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

なぜこの手紙に父の心が揺り動かされたかということとは、私にはよくわかります。それは、親友であり、かつ何よりもキリスト者である平山さんの、父に対する

真心が、誠意が、愛が、手紙の行間にあふれているからであります。悲しんでいる父に対して、今、自分がほんとうの慰めを与えられるのは、イエス様の愛を伝えることであると決断して、心からの愛と、深い同情心と、へりくだりの態度とをもって、祈りつつ、福音を伝え、その思いが読む者にはつきり伝わってくる手紙だからであります。

私たちキリスト者は、悩み、苦しみ、悲しみの中におかれている人に対して、人間的な慰めは何の助けにもならないこと、そして、ほんとうの慰めは、私たち人間を愛してくださっている、生けるまことの神様だけが与えてくださるものであることを、自分自身の体験を通して知っています。ですから、私たち信者は、悲しみ、悩み、苦しんでいる方には、その神様からのまことの慰めが与えられるように祈るのです。聖書にこうあります。

神は、どのような苦しみのおきにも、私たちを慰めて

そして、神様は私たちに対する慰めを、御子イエス様をこの世に遣わすことによつて明らかにしてくださいました。イエス様は父なる神様のみこころに従つて、神の御子であるにもかかわらず私たちと同じ血肉のからだをもつてこの世に来てくださり、イエス様の説く教えに反対する人々からさげすまれ、あざけられ、迫害されるといふ、ひどい目に遭われ、私たち人間の悩み、苦しみ、悲しみをご自身で味わってくださいました。

私たちの大祭司（御子イエス様）は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、が、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。
(ヘブル 4・15)

そのように人間の悲しみ、苦しみをご自身が味わってくださいましたイエス様だからこそ、私たち人間を慰めることがおできになるのです。

神様から受ける大きな愛の慰め

くださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによつて、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。それは、私たちにキリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによつてあふれているからです。

(2コリント 1・4-5)

また、私たち人間を愛してくださる神様は、嘆き悲しむ者に対して

わたし、このわたしが、あなたがたを慰める。

(イザヤ 51・12)

母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰め、エルサレムであなたがたは慰められる。

(イザヤ 66・13)

と約束しておられます。

私たちキリスト者は、わがまま、自己中心という神様のみこころに背く自分の罪の身代わりに、神様がご自分の独り子イエス様を十字架に架けてくださったことによつて、自分の罪が赦されたということを知り、その尊い救いのみわざを通して神様のたとえようもない大きな深いご愛を知りました。そして、この神様の大きな愛は、イエス様を通して私たちに注がれたように、救われた私たちを通して、他の人々に注がれるのであります。その意味で、キリスト者は神様の愛を、神様の慰めを運ぶ器なのです。

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によつて私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださいましたのなら、私たちもまた互いに愛し

合うべきです。

(1ヨハネ 4:9-11)

神様の愛を、^{あわれ}憐みを受け、イエス様を信じる信仰を与えられた者には、神様の御霊が宿ってくださいます。そして、その御霊にゆだね、導かれて歩むときに、御霊の実が与えられるのです。御霊の実は神様のご性質であり、次のようなものです。

御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。
(ガラテヤ 5:22-23)

平山さんも、神様の御霊に導かれてこの手紙を書かれたのでしょうか。手紙の中で、繰り返し、何度も何度も、「重田君」、「重田君」と呼びかけておられます。これによっても私は、父の痛み、悲しみを思いやる、平山さんのイエス様にある深い愛と、同情心と、誠意とを感じ取ることができました。まさにこれは御霊の実にあられた手紙でありましょう。

を新改訳聖書で読んでみます。

神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにあら助け。それゆえ、われらは恐れな^い。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。(詩篇 46:1-2)

平山さんがこのみことばを選ばれた理由を考えてみますと、逆境の中に置かれた父に、一刻でも早く、唯一にして、生ける、まことの神様、力と愛と憐れみに満ちた神様を信じてもらいたい、そしてその神様に信頼して、たとい、どのようなことが身に降りかかって、神様は必ず助けてくださるという確信を持ってほしい、との平山さんの祈りが、このみことばに込められているように思いました。

私はこの手紙を読んだときに、あのヨブの三人の友人のことが頭に浮かびました。彼らもヨブの悲しみ、苦しみを慰めようと思っていました。動機は平山さんと同じであります。しかし、彼らのとった態度は平山

神様から受ける大きな愛の慰め

また、悲しみ、悩み、苦しんでいる人に対して、私たちがなすべき最善のことは何であるかと言えば、それは祈ることでしょう。そして、その祈りは「その人が、慰め主、癒し主であるイエス様との出会いに導かれるように」という、真剣な祈り以外にはないでしょう。

平山さんは、父と父の弟妹たちのために、日に三度祈ると神様に誓われました。それだけではなく、神様がその祈りを一刻も早く聞き入れてくださるようにと、自分の日々の行ないを、ますます神様のみにことにかなうものとなるようにすると神様に誓われました。私たちが個人の救いのために真剣に祈る、そのような祈りを神様が喜んで聞き入れてくださらないはずはありません。

さて、私たちは、悲しんでいる人、苦しんでいる人を慰めるために、何を、どんなものを贈れば最善でしょうか。平山さんは神様ののみことばを父に贈ってくださいました。それが手紙の終わりに書かれている詩篇四十六篇からのみことばでした。もう一度、この箇所

さんのそれとは根本的に違っていました。彼等^{かれら}はヨブが苦難に遭った原因は、ヨブが神様に対して罪を犯した結果であることを認めさせようとして、ヨブを慰めるどころか、論争をしてしまったのです。彼等は主の愛によってヨブを慰めるのではなく、自分を高い所においてヨブを見下し、裁いてしまったのです。

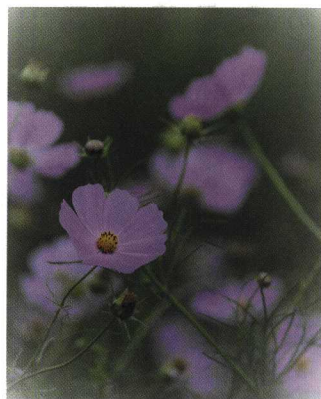
しかし、私は自分を省みて、これまで果たして平山さんのように深い愛を持って、人を慰めたことがあったろうか、人に接したことがあったろうかと、この手紙を通して深く自分の愛のなさを示されました。

愛のない信仰は無価値であるとパウロが言っている通りであります。その意味で、この手紙は私にとって「あなたは神の愛に欠けている。わたしがあなたを愛したように、あなたも隣人を愛しなさい」という神様からいただいた、かけがえのない大切な論しの手紙となりました。

そして、この手紙はまた、イエス様に「どうか、私が少しでもイエス様からいただいた愛を、まだイエス様

をご存じなく、悩んでいる人々、苦しんでいる人々、孤独な人々に、イエス様をお伝えする者となれますように」と主に祈るきっかけともなったのです。

重田定義(町田集会)



すべてを統べ治められる 主イエス様

野田 洋子



ご主人の房男さんと

私は、一九五一年に東京で生まれました。

父は宗教的な人で、祖父の代からの宗教を堅く信じていました。一つ一つの考え方が教えに照らし合わざれ、吟味されました。さらに、すべてに厳しく口を出す父に、私はいつも心の中で反発していました。大人になってからは、父の生真面目すぎる性格ゆえのストレスや父なりの愛も理解できるようになりましたが、その当時の私は自分を守ることで、精一杯でした。時には父に反抗して口答えしましたが、そのたびに父からの叱責を受けました。物心ついた頃から鎖につながれたような不自由さを覚えていました。素直に言うことを聞けず、反抗する思いをいつも持ちながら育ちました。こうして、罪の意識は父の宗教も相まって、どんどん膨れ上がっていきました。母が優しくったことは慰めではありましたが、心には空しさが広がり、子どもなりに、もっと自分らしく自由に生きる道はないかと模索していました。一方で、良い人にはなりたけれ

ど、なろうと思ってもなれない葛藤^{かつとう}もありました。

そのような中、友人の誘いで当時一九六八年に小金井公会堂で持たれた大きなキリスト教の伝道会に参加しました。その伝道者を通して、「私のすべてを知っておられるばかりでなく、私の大きな罪の身代わりにイエス・キリストがその罪を背負ってください十字架にかかって死んでくださったこと。私たちはただ信じるだけで救われること」を聞きました。その頃、いつも悩みが重くのしかかっていましたが、イエス様の招きにただ、驚いてしまいました。高校生の時でした。

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

(ローマ 5・8)

それまで、神様の概念ははっきりしないばかりか、

私のような所までは下りてきてはくれず、遠い存在でしかありませんでした。その伝道会で、今は天の御国に帰られた、ベック宣教師と初めてお会いしました。名刺には「神のしもべ、ゴットホルド・ベック」と書かれてあったと記憶しています。後に、ベックさんとお話しの機会が与えられた時、主イエス様の前に祈りました。祈ったあとの喜びと自由、まことの神様との平和と平安は、とても言葉に言い表せないものでした。重い荷物は十字架のもとに下ろされ、つながれていた鎖も解き放たれたような感覚でした。

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。

(1ペテロ 1・18、19)

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

(ローマ 5・1)

その後の長いようで短い人生は次の聖書のみことばのとおりです。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。

(哀歌 3・22)

主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦勞は何もそれに加えない。

(箴言 10・22)

数々のイエス様がしてくださいだった恵みを思い出しては主を賛美し、感謝しています。同じイエス様を信じる人との結婚に導かれ、子どもが三人与えられたこと。その子どもたちに対しては、いつもの外^{まは}れなことばか

りしてきたのに、主イエス様のあわれみで、子どもたちが主を信じて、洗礼にまであずかったこと。何度もの引越しや、海外生活で得た大切な友人たちが、主イエス様を信じられ、主にある兄弟姉妹となられたこと。双方の親を聖書にもとづいた葬儀で、天の御国に送り出したことなど…。他にも、主イエス様がなしてくださいだったことは語り尽くせないほどたくさんあります。どれ一つとっても、主イエス様の恵みでしかありません！

現在、すっかり高齢者の仲間入りをしましたが、イエス様は、昨日も今日も永遠に変わらず生きて働いてくださっています。主イエス様に救われた喜びは、人生の短い旅の途中で与えられた数々の試練の中で、その都度、主イエス様に助けを求めながらも変わることはありません。

ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝し

ます。

(2コリント 9:15)

次に、主イエス様に感謝と賛美を捧げつつ、最近主からいただいた恵みについて書きます。

一 主人の病氣を通して

主人は、二〇〇八年、五十八歳の時に腎臓がんが与えられ、その時、すでに胸骨にも転移があり、ステージ4と診断されました。それから、何回か、死の淵までいき、そのたびにイエス様は小さな小道を用意して下さり、奇跡のように命が保たれ、今に至っています。「人間は病氣では死なないよ。主が呼ばれたときに召されるのだよ」と常々話しておられたベックさんの言葉を実感しております。

二〇一六年夏に、御代田で行われていた喜びの集いに主人共々参加していた時のことです。前日から集っていたので、私は十数人のお台所をお手伝いされていた

る方々と共に昼食をとっていました。主人は遅れてきて、昼食をとった後、急に小さな震えが始まりました。始めは主人の冗談かと思ったくらい、それは突然でした。その小さな痙攣^{けいれん}が大きな痙攣^{けいれん}へと変わっていきました。考えてもいなかったことが起こり、私はぼう然としていました。集会の皆さんの助けで救急車が呼ばれ、主人は近くの小諸の病院に運ばれました。病院到着後、すぐにMRIがとられ、数日の入院が決まりました。集会の姉妹たちも駆けつけてくださったのですが、医師の部屋での説明には「個人情報なので」と、入室はできず、私だけが医師とお話することになりました。医師からは「大変言いにくいことですが、がんの脳転移です」と告げられました。「今までの病院へ戻るまでの応急措置はしますが、難しい瀬戸際です」と、後で医師の話された録音を聴きながら、事態が深刻であったことをあらためて理解しました。

この間、痙攣^{けいれん}が起きてからすぐに御代田の会堂では

集会の皆さんが一斉に祈りを捧げてくださり、また、到着し始めた方々も祈りに加わってくださっていたと後で聞きました。お祈りに支えられていたのだと思います。また、以前から何度か起こった突然の出来事の中で、このことは主イエス様の許しなしには起きないと思い、心配しつつも心は静かでした。

翌日、詳しい結果を何枚かの画像とともに見せていただくことになりました。その日にも何人かの集会の皆さんが共にいてくださいました。その時には看護士も医師の方も私たちの関係が家族のようであると察知されたのか、黙って椅子をいくつも運んでくださり、小さな医師の部屋は椅子でいっぱいになり、説明を伺うことになりました。

主人の発病以来、いつも、私たちのまわりには集会の皆さんが取り囲んでくださり、多くの祈りを主に捧げていただいたことは大きな励ましです。主人の病を通して、主イエス様にしかできないお取り扱いと、

集会の皆さんの中におられる主イエス様のご愛をいつも見せていただいている日々となっています。また、メッセージで話される、主イエス様のみからなる教会の一員であることも実感しています。

それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたり合うためです。もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。

(1コリント 12:25-27)

主人は、短期入院を終えて、東京の病院で速やかに治療が施され、今に至っています。いつ、再発、転移があるかわかりませんが、私たちの身体を胎内^{たいない}にいる時から形造ってくださった造り主に祈りつつ、ゆだねる日々です。明日のことはわからないので、朝ごとに、今

日一日の思い煩い、願いなどをすべてイエス様にお祈りして一日の力をいただいています。

主人は、先に天の御国に召されたベックさんや集会の皆さんをいつもうらやましいと思ひながらも、ベックさんを通して教えられたお薬、「思い煩^{わづ}わない、心配しない、恐れない」の三つのことばを実践して、生活しています。毎日三章ずつ聖書をふたりで読んで後、お祈りしていますが、時間になると集会でいただいた大きな字で書かれた大きな聖書を手にして私を待つてくれる主人です。イエス様を信頼している主人の背後で働いておられる主の栄光を見せていただくとともに、イエス様の偉大さとご愛を思うこの頃です。

病人を持つ家族は少なからず緊張を強いられるものです。主人の病が少し落ち着くと、ホッとすると共に、甘えが出てきてわがままを言いたくなり、主人を別の意味で困らせている私です。イエス様がその都度なしてくださる恵みと、守りを見せていただきながら、毎

日意識してゆだねることを学ばせていただいています。

ベックさんがかつて、私たちの写真を撮ってくださった写真の下に「Jesus is the answer」日本語では「イエス様こそが答えです」と書いてありました。「人生のすべての疑問に対する答えは、私たちの造り主であるイエス様が握っておられる」とベックさんは確信しておられました。ベックさんとの最後のお話し合いの中で「主イエス様は最善しかならないよ！」と弱りゆくお身体にもかかわらず力強くおっしゃいました。それは主人にとっても大きな力となっています。

どんなことが起こっても、天の故郷にイエス様の赦しゆえに入れていただけるという確かな希望があります。永遠にイエス様と一緒に住める天の故郷があるという望みのゆえにイエス様に感謝いたします。

二 最近の親族の救いを通して

二〇一六年の夏、私の弟の子、私たちの姪が御代田

で洗礼に導かれました。このことを通して、祈りを聞

いてくださっている方、生ける神様であるイエス様は約束を成就し続けてくださることを教えてくださいました。甥、姪たちのことは祈っていました。私の頭の中には姪の一人が御代田で洗礼に導かれるという発想がそもそもありませんでした。姪はベックさんの葬儀を通して、集会に集いたいと自分で決心したようです。不思議な主のお働きです。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——主の御告げ。——
(イザヤ 55:8)

喜んでいる姪を見て私の中にも大きな喜びが湧いてきました。イエス様がすべてなさったこと、甥、姪たちのことも信頼してゆだね、祈り続けたいと思いました。また、以前、ベックさんのお話しの機会が与えられ

た主人の従兄弟の子どもが大阪の会社に入社が決まり、引越した場所が集会の方のお宅の目と鼻の先の所であることがわかりました。

主は隔々まで見ておられ、必要な導きを与えてくださることを感謝いたしました。これからのお導きを樂しみにしています。

私たち夫婦についても、祈りの中で長い年月が流れています。吹けば飛ぶ塵^{ちり}のような私たちです。私たちの祈りの年月の数え方と、天地をお造りになり、すべてを統べ治められる方との年月の数え方はまったく違うようです。私自身、高齢者となっても何一つ変わらないどころか、イエス様の救いがなければ、いまだに暗闇^{くらやみ}の中に希望なく座るしかなく、汚れ果てた者でしかないことが、ますます光に照らされて明らかにされています。墮落した者のもつとも内的な性格は、偽る者だそうですが、まさに私そのものです。しかし、感謝なことに、もう私はすでに十字架のもとで死んでいる

ことを日々見せていただいていますから、残りわずかな人生を十字架のもとに横たわっている自分を見ながら歩んでいきたいと思っています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ 2:20)

二〇〇七年六月十日に、ドイツ、アイドリンゲンで話されたベックさんのメッセージを事あることに読ませていただいていますので、以下、抜粋しご紹介させていただきます。

「いかなる苦しみがあろうとも、すべてを御手から受け取るのです。主がすべての苦しみや圧迫から私た

ちを解放されるのは、私たちにとって必ずしも良いことではありません。パウロに対して、サタンの使いを送り、こぶしで殴らせたのは主でした。それはパウロが高慢にならないためでした。イエス様はご自分の栄光に役立つなら、介入してください。私たちのすることは何も価値はありません。主イエス様のご目的は、私たちの中に、また、私たちを通して主がご栄光を受けられることです。私たちに何が起ころうとどうでもよいのです。自分の力により頼むのではなく、主の御心を尋ね求めるならば、主は必ず働いてくださいます」

このベックさんの言葉をかみしめ、そのように思えますよう、日々祈り願っています。また、愛する集会の皆さんと共に、一瞬のうちに上げられ、主イエス様に会える時を心待ちにしています。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの

響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それが

らキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと一緒に雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会つのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになりました。

(1テサロニケ 4:16-17)

野田 洋子 (のだ ようこ)

井の頭小学校、府中高校、淑徳短期大学社会福祉学科卒業

夫 房男

長男夫婦 野田 尚広、泉 (琴葉、道都)

娘夫婦 野田 浩司、牧子 (主樹、勇矢、愛香)

次男 野田 恵太

私たちの主イエス・キリスト

高田 英彦



右から二人目が英彦さん、集会のみなさんと

私は昭和十七年四月に東京の足立区で生まれました。戦争中であつたので、二年後に母の生家である宮城県（かづの）の仙台市、その後に秋田県鹿角市（父の実家）へ疎開しました。山あり、川ありで自然の豊富な所でした。

昭和二十三年の暮に東京都大田区の方へ戻つて来ました。

父も母も故郷ふるさと想いの人で、私たちとの思い出話を、懐かしそうに喜んで聞いておりましたが、天の故郷に召される時には、イエス様を信じておりましたので平安でした。「兄（博之）と協力して、弟たちをよろしく頼むよ…」と言ひ残して召天しました。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従つて召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ 8:28）

をお赦しください…」と。その後しばらくして兄に「お前は自分では信じていると思つてゐるかもしれないが、日常の生活に生かされていない。それは信仰とは言えない」と言われ、その通りかもしれない、と思つたことがあります。

キリストを信じる信仰によつて義と認められるためです。
（ガラテヤ 2:16）

私は小学校四年生の時に、近くのカメラ屋でやつていた金曜学校に集い、初めてイエス様のことを知りました。幻燈や紙芝居などを見ながらのお話の中で、天国や地獄があることや、羊飼いの話など、大変興味深く聞いていたのを覚えています。その頃いただいた絵入りのみことばカードに、「求めよ。さらば与えられん」、「門をたたけ。さらば開けられるであらう」、「ただ信ぜよ。いつにあつても目をさましていよ」、「我、常に汝らと共に在る」等々とあつたのを覚えています。

また、子供の讃美歌、「主、我を愛す。主が強ければ、我、弱くとも恐れはあらじ」とか、「それ神は、ひとり子を給う程に世を愛し給えり」など、その頃に覚ええました。中学校、高校時代はクラブ活動や受験ということでイエス様から離れておりました。兄に連れられて、たまに外国人宣教師の集会に行くくらいでした。しかし、夜眠りにつく前にはいつも祈つてから寝ました。眠っている間に地獄に行かないように「今日一日の罪

昭和三十六年三月、大学受験に失敗し、浪人生活に入りました。学生でもなく社会人でもない、何か宙ぶらりんで空しい時期でした。勉強して、良い会社に勤め、人並みの生活を送るのが、平穩で良い人生なのか。それを目指しても、能力、才能、環境等の差のみならず、運、不運があり、あまりにも不公平ではないのかと考えるようになりました。そして勉強の合間に夜空を眺めながら、「あの空はどこまで続くのだろう。あの月や

星は誰が創造したのだろう。また海や山、そこに住んでいる動物や植物。人間が造ったものでないことは確かだ。そんなことを考えて気が遠くなるような経験もしたことがあります。

あなたを贖い、あなたを母の胎内にいる時から形造った方、主はこう仰せられる。「わたしは万物を造った主だ。わたしはひとりて天を張り延ばし、ただ、わたしだけで、地を押し広げた。」
(イザヤ 44・24)

時々、兄からもらった聖書を開いてみました。しかし、「今は何も考えないようにして、勉強しなければいけない。両親を安心させるために……」と思うものの、ただ勉強しているふりをしていることもありました。浪人中には、「生長の家」や「日蓮宗」にも人に誘われて行ったりもしました。この世の教えには良いかもしれないが人間のつくった神や仏の話は納得できかねるもの

のであり、空しさを感じた覚えがあります。

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かつて行つた。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。
(イザヤ 53・6)

人間にとって何が正しいのか、ただ道徳的なことを守り、悲しい時には泣き叫び、氣にくわなければ怒り、利^{せう}那的な快楽を追い求め、寿命が来れば死ぬ……。この世的な計画と自己満足の生活に追われ、真の生かされている意味を追求することがないまま、人生の半ばで挫折する方々が本当に多いと思います。

だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。
(マタイ 7・8)

昭和三十七年四月、大学は希望校には入れませんで

したが、大学時代には素晴らしい友人たちとめぐり会えて大変有意義で楽しい時期でありました。彼らとは何でも話し合え、一緒にいろいろなアルバイトをしたり、旅行にもよく行きました。イエス様の話もしましたが、意見、考え方の相違も多々あり、空しさを感じたこともあります。

何事でも神のみどころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。
(1ヨハネ 5・14)

そんなある日、兄が当時集っていた吉祥寺キリスト集会の夜の集いに、誘われて行きました。ベックさんはじめ集会の皆さんがうれしそうに歓迎してくださいました。昭和四十一年三月、大学を卒業し、銀行へ就職しました。朝から晩まで現金の勘定、接客、目標達成の会議が主な仕事でした。休日はお客様とのゴルフ、土

曜日は職場の人達との麻雀、飲み会等々。当時は父親にも「銀行についていつもそんなに忙しいのか？」と疑問をもたれるほどでした。退職したいと思ったこともありました。

そうした頃、学生時代につき合っていた彼女(現在の妻)としばらくぶりに再会しました。彼女との交際や結婚については以前、身内に反対されていました。それは彼女には両親や兄弟もなかったからです。母親は二歳の頃に亡くなり、父親はシベリアから帰って来ず、生死も不明だったのです。それで母方の養子に入り、叔父、叔母に育てられたようです。私の父親の実家と同じ村なので、親戚から「何も田舎の小娘と結婚しなくてもいいべ……」と反対されたわけです。彼女は中学生の頃から孤独感を抱いていたようで、両親、兄妹のそろっている家族がうらやましかったようです。しかし彼女はやさしい叔父、叔母に守られ、何不自由なく育てられたと言っていました。私は同情もありまし

たが、イエス様が絶対幸せに導いてくださる！と確信しました。

昭和四十二年十一月に結婚いたしました。

信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。
(ヘブル 11:1)

あなたの太陽はもう沈まず、あなたの月はかげることがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。
(イザヤ 60:20)

私たちは夫婦で吉祥寺キリスト集会に集うようになりしました。兄たちとその家族も毎週、私の家に立ち寄ってくれ、交わりの時が与えられました。そして昭和五十三年三月二十六日、夫婦そろって、ベックさんを通して洗礼を受けました。夫婦で共に受洗するのは當時では始めてとのことで、大変喜ばれ祝福されました。

私は洗礼の水からあげられ、顔を出した時、あたり中が真っ白に輝いて見えたことをハッキリと覚えております。

夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある。
(詩篇 30:5)

結婚して約十年の間に、私たちは三人の子供を授かりました。長女の雪香(四十四年七月生)、次女美晴(四十七年四月)、長男英樹(五十年九月生)です。それぞれ出産後間もなく病気が与えられました。雪香は胃腸障害で飲み食いしたものをすぐに吐き出してしまうので、なかなか体力がつかず痩せていきました。美晴は股関節脱臼でギブスをはめ、なかなか這うことも歩くこともできず、妻がおんぶして二年以上病院に通いました。三番目の英樹はネフローゼという難病で、数年入院を繰り返しておりました。幼い子供たちをかか

えて大変なことでした。妻茂子は「自分がいけないからだ！」と自分を責め、瘦せ果ててしまいました。私の母もチョイチョイ泊まりがけで来て手伝ってくれていました。疲れてしまったようでした。私も働いていなければならず、それでも時々休んだり早く帰ったりしていました。どうすることも代わってやることもできない自分自身の無力さをつくづく感じました。今

思えば、人生で暗く辛い試練の時でした。この時、親切にいろいろな薬、病院を教えてください。慰めてくれる方々がおりました。そして集会の皆さんも、祈ってくれたようです。

絶えず祈りなさい。
(1テサロニケ 5:17)

洗礼を受けてからしばらくして妻が「子供たちはもう治ったよ！」と、突然断言しました。私は「まさか…？」と言って黙っておりました。私が不信仰だったのです。

たのです。しかし、その後、子供たちは病院に通うこともなく元気になってきました。

信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。

(ヘブル 11:3)

肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。
(ローマ 8:6)

それ以後、三人の子供たちも毎週日曜日、吉祥寺キリスト集会に集うようになりました。そして子供たちも次々と受洗いたしました。子供たちだけで仲良く八王子から電車で通い、子供の集会に集うようになり、また妻も元気になり、子供当番や食事作りの当番等にも喜んで行くようになりました。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によつて救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

(エペソ 2:8)

昭和六十三年四月、私たち家族は仙台市に転居しました。それは当時元旦礼拝のメッセージのあとに、その年の指針として裏返して配られていたみことばカードがきっかけでした。昭和六十二年に配られたみことばカードは、「さあ行け。わたしがあなたの口とともにあつて、あなたの言うべきことを教えよう。…あなたがたのなすべきことを教えよう」(出エジプト 4:12、15)でした。また、その翌年一月元旦では、「これは、あなたがたにとつて、むなしきことばではなく、あなたがたのいのちであるからだ。このことばにより、あなたがたは、ヨルダンを渡つて、所有しようとしている地で、長く生きることができる」(申命記 32:47)というみことばでした。

そして妻のカードにも「あなたがたの神、主が命じら

れたすべての道を歩まなければならない。あなたがたが生き、しあわせになり、あなたがたが所有する地で、長く生きるためである。」(申命記 5:33)。

翌六十三年元旦にも、「その方は、真理の御霊です。

世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻つて来るのです」(ヨハネ 14:17、18)とありました。

このようなみことばを引いたことをベックさんに話しましたところ、「これは正月のおみくじ遊びではないよ。何か心当たりはないの?」と聞かれ、「もつと年をとり、定年にでもなったら仙台へでもと思つていました」と申し上げると、「いや、もう歳をとつています」と言われました。その時、私は四十四歳でした。また

当時、東北には集會が無かったので、「ぜひ行くといいよ」と言つていただきました。しかし、そうはいつても、「私など行つたつて…」という気持ちと、子供たちの学校の件、自分の就職関係、家の建築の件、またその資金の事等々、考えるとそんな簡単ではないと思ひ込んでおりました。しかしベックさんは「イエス様の御心になうことなら絶対大丈夫。僕も祈っているから茂子さんともよく祈ることです。祈りは必ず聞かれます」と励ましてくださいました。

あなたがたのうちに苦しんでいる人がいますか。その人は祈りなさい。

(ヤコブ 5:13)

自分の思いで心配していたことが、一つずつ解決され、思い煩いは何だったのだらうと不思議に思うほど、転居する方向に進んでいきました。

昭和六十三年四月、仙台で初めての日曜礼拝の時が、

我が家に備えられました。家は未完成なところもありましたが八十名余の方々が集まりました。忙しい思いはあつたけど、神様、イエス様のご存在をあらためて覚えることができて、感謝、感謝でありました。その後、隔週で礼拝が備えられました。その年の七月には東北で初めてのバイブルキャンプが宮城県の釜房湖で行なわれ、百五十名の方たちが集われ、また受洗された方もおられ、とても祝福されました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによつて、あなたがたの願い事を神に知つていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守つてくれます。

(ピリピ 4:6、7)

その後二、三か月に一度、ベックさんが来てくだ

さり、聖書のメッセージを取り次いでくださいました。またその他にも集会の皆さんの関係の結婚式、病気のお見舞い、葬儀の時などにも来てくださいました。時々我が家にも泊まって歓談してくださいました。

私は自宅で事務用品の販売、小学校、中学校の制服や運動着の販売をしておりました。少し暇な時とか、配達、仕入れの帰りなどには集会の皆さんのご自宅等に立ち寄って、家族も交えて語らうこともよくしておりました。そうすることによってか、二、三十名の方々が日曜礼拝に集うようになりました。バイブルキャンプの時に参加してくださる方も多くなりました。そのうち我が家では手狭になり、ほかで集会のできる場所を探しました。何か所か移り、現在の「宮城県青年会館」に落ち着きました。

東北の地にも山形市、盛岡市、青森市に集会が備えられていきました。さらに盛岡においてもバイブルキャンプが備えられました。盛岡の深沢門太さんと手

をとり合って喜んだものです。よく祈り合いました。

何事でも神のみごころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。
(1ヨハネ 5:14)

東北ではこれまで六十名以上のイエス様を信じる方々が誕生しました。私の母、弟たちをはじめ、いこの田中徹・和子さん、娘婿たち、友人たちも導かれました。本当に感謝でいっぱいです。

平成二十三年三月十一日、東日本大震災が東北地方を襲いました。

集会に集う多くの方々も、被害を受けました。特に、鎌田芳子さんは津波の直撃を受けて天に召されました。家を失った方も数名おられます。当時は何と慰めたらよいのか、言葉を失うこともありました。

私も震災時は蒲生という海のすぐそばで仕事をしておりました。その時、津波の知識や経験もなかった私は、自宅がどうなってしまうのか心配でした。普段は三、四十分で帰宅できるところが、その日は七時間半もかかりました。道路は車でいっぱい、電柱が倒れて電灯がつかず、まっ暗でどうにもならない状況でした。あちこち横道に入りながら、やっと帰宅しました。家の壁にはヒビが入り、家具は傾き、家の中は散らかっておりました。水道は止まり、電気もつかず、それが二週間も続きました。その後、スーパー、商店、ガソリンスタンドもしばらく営業を再開できず、今までの人生で最も苦労しました。

二週間後には仕事の現場に行きましたが、道路は通れない程で、家は崩壊したままで、家財が一面に散らかり、自動車も津波に流され、へこんだり、壊れたまま重なっていました。すぐさま他県から来られた工事関係者の人たちが懸命に片付け、まず車が通れるよう

にしてくださいました。その近辺だけで二百八十名近くの方々が死亡されたとのこと。この患難を通して一人でも多くの方々が主イエス様を信じ救われることができるように切にお祈りしています。

ほむべきかな。日々、私たちのために、重荷をになわれる主。私たちの救いであられる神。
(詩篇 68:19)

私は現在、心臓狭心症で動脈にステントという管を挿入しており、また腎臓結石、前立腺癌をわずらい、通院している状態ですが、そのことを通して祈る機会を多く与えてくださっている主に感謝しております。

早く天国へ行きたい…、ご来臨が待ち遠しく思うこともありますが、私を生かしてくださいっているイエス様にすべてをおゆだねしております。

わが神、主よ。私は心を尽くしてあなたに感謝し、と

こしえまでも、あなたの御名をあげましょう。

(詩篇 86・12)

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

(2コリント 4・16)

そして次のみことばをいつも心に刻んでいきたいと思えます。

主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。

(1テサロニケ 5・23)

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

(詩篇 119・105)

高田 英彦 (たかだ ひでひこ)

大田区立池雪小学校、大森第十一中学校、高輪高等学校、日本大学商学部卒、八千代銀行、ニッコー・リサーチ仙台、エイコー堂文具店経営

妻 茂子

長女 雪香

次女 美晴

長男 英樹

主の御恵み——主は祈りに答えて

くださる

高幣 信彦



左端が信彦さん、ご家族と

私は、日本の大学を卒業すると、航空宇宙工学を勉強するために、アメリカのカリフォルニア州に留学しました。そこで、留学生のために、月一回インターナショナル・スチューデント・パーティを開いて、イエス様を伝えていたジョージ・ジョージアデスとその妻マリーンに出会いました。もともと彼らは海外に出て宣教をしたかったようですが、それがかなわず、自宅を開放して留学生にイエス様を伝えていたのです。

その頃、私は英語の勉強やアメリカの友人が欲しく、よく彼らの家に行っては、アメリカンクッキーを食べ、いろいろな議論をしました。彼らの中に何か光る魅力を感じて、時間があれば足を運んでいました。そこで英語の聖書を読み、聖書の言葉を引き合いにして議論し、時に彼らの行動を批判したりしましたが、彼らはいつも優しく私の議論につき合ってくれました。

慣れない留学先での勉強、さらには孤独感も加わり、この頃から私は宇宙の創造主である神様を探し始め

ていました。私は、宇宙万物の創造主である神が私の味方になって私を助けて欲しいと思い、神様を探し続けましたが、神様はまったく答えてくれませんでした。ただ聖書には、イエス様を通して神を知ることができると書いてあることを知りました。

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のもとに来ることはありません。」

(ヨハネ 14:6)

ある日、ジョージとマリーンを含めた二十人ほどのグループで、ロサンゼルスから二時間ぐらいの森の中にある、キャンプ地アイディワイルドに出かけました。その日の夜、他のメンバーは大きな岩のある「ロック」と呼ばれる所に行きましたが、なぜか私は一人静かな場所で、留学の苦しみについて考えておりました。

その時、「神様への道がイエス様だけなのなら、イエス様を受け入れます」と自然と言っておりました。その後、無謀にも懐中電灯無しでみなの後を追って行くことになりましたが、あたりは真っ暗で、途中で道に迷いそうになりました。そこで早速、先程受け入れたばかりのイエス様に助けを求めました。本当に真剣でした。「イエス様。あなたを信じ受け入れたのですから助けてください。」すると急に明かりが一つ灯り、その明かりを見ながら何とかロックの岩山にたどり着くことができました。まさに「光よ、あれ！」です。

神は言われます。「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」(2コリント 6:2)

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

(エペソ 2:8)

後に知ったことですが、ロックにいたメンバーは、星空がよく見えるようにと懐中電灯を消灯することにしましたそうです。そんな中、なぜか一人だけ懐中電灯をつけていましたが、誰もそれをとがめなかったようです。それで私は救われました。

キャンプから帰ると、応募していたミシシッピ州立大学から入学許可が届きました。航空宇宙工学を勉強するつもりで渡米しましたが、カリフォルニア州の大学での勉強は大変で、勉強についていけず、もう少しかリフォルニアの大学を追い出されそうになっていたのです。入学許可がきますとこれは神様のみこころだと信じ、ミシシッピ州立大学に行くことにしました。私も若かったので、マツダのロータリー車「サバンナ」でロサンゼルスからミシシッピまでの三千三百キロを二日で走破し、大学に到着した日は、寮で一日中死んだように寝ていました。大学では、マラナーサ(主よ来て下さい)というクリスチャングループと出会い、楽

しい充実した日々を送り、神様の助けをいただき、無事卒業することができました。

卒業後はアメリカで就職をしようと何社にも履歴書を出しましたが、専攻していた航空宇宙関係は軍事秘密が多いため、アメリカ市民でないと採用は不可と断られ、泣く泣く日本に帰国しました。しかしこれも、神様の導きでした。広島自動車会社のマツダに入社ができ、結婚をさせていただき、一人の子どもに恵まれました。

一九九二年九月にミシガン州の北米マツダに出向になり、再びアメリカの土を踏みしました。翌年には、二人目の子どもが家内のおなかに入えられました。死産でした。家内はよく頑張ったと思います。亡くなった子に「聖(H)と名前をつけました。同じ時期に、仲の良いクリスチャンの家族の子のイワン(I)、スコット(S)と亡くなり、教会の人が三人の頭文字をとって「HIS」すなわち「イエス様の者」と呼んでください

ました。イエス様に早くから愛されたのだと思います。聖^{ひじり}は先に天国に行きましたが、私たちは今、恵^{よしひろ}寛^{ゆり}、友理恵^{えいじ}、恵治^{けいじ}の三人の子どもを授かっております。

一九九六年末に北米マツダでの仕事が終わる頃、私は、そのままアメリカでの生活を続けることを望み、転職先を探しました。その時、アメリカの自動車部品製造会社のペントラ社より、日本の自動車会社の担当営業の仕事をやって欲しいとの申し出があり、これも神様のみこころだと信じ、あたかもアメリカのナイアガラ^{ナイアガラ}の滝から飛び降りるようなつもりで、転職をしました。

そこでもアメリカで生活するつもりでいましたが、それから一年半後、日本に支社を設立することが決まり、名古屋に帰国しました。仕事は順調で、日本の法人も設立し、それなりの地位と給与を得ていたこともあり、私はかなりおごり高ぶっていたと思います。

デトロイトにいた頃、家内が電話回線を利用したキ

リスト集会の日曜礼拝に参加をしていたこともあり、帰国後は名古屋キリスト集会に集いました。

名古屋で五年過ごした後、東京に引っ越しましたが、この機会に新しい教会を探しました。いろいろな教会に参加しましたが、もう一つ何かが違ふと感じられ、次第に面倒になり教会にも行かなくなってしまう、少しづつ神様から離れた生活になっていったと思います。一方、家内は、ときどき吉祥寺キリスト集会に通っていました。

このような生活をしていた頃に、神様から何か罰が与えられるのではないかと恐れを抱く様になりました。ちょうどその頃、リーマンショックが起こり、めでたく会社をクビになり、失業しました。これではいけないとの思いで、日曜日にキリスト集会の礼拝に通い始めました。主のもとへ立ち返ることができたのは、私のために祈ってくださった集会の皆さんの祈りがあったからだと思います。

その後しばらくは、まだそれなりの貯^{たくわ}えもあったこと

とから、昔からやってみたかった株の取引をしておりました。しかし、一円の動きを追うために、椅子に座り続けてモニターとにらめっこをしなければならぬ苦痛や、株の怖さなどがだんだんとわかってきたあたりで、毎日の取引はやめて、別の仕事をやり始めました。ただし、ちやっかり今後有望と思われた風力発電の株にほとんどの資産を投資していました。

こうして仕事も安定しない中、広島に住んでいた父が肺気腫で緊急入院することになりました。母は認知症のため、父を看病することが出来ない状況だったこともあり、二〇一〇年十二月に、私は仕事を辞め、一人で広島に帰省し、父の看病と母の看護をすることになりました。これは神様のみこころだと信じ、何のためらいや心配もなく、家内に子どもたちの世話をまかせておりました。今思えば、家内は東京で子どもたちの面倒を一人で見ていたわけですので、大変だったと思

います。

こうした折、翌年の初めから、持っていた風力発電の株の価値がどんどん下がりはじめ、ついに五分の一となってしまうました。定期的な収入はありませんし、唯一の資産である株は価値が無くなり、まさに踏^ふんだり蹴^けったりでした。けれども広島で両親の世話をしているれば、神様から御恵みがあるとの確信をもって、毎日ただ神様に祈りながら生活をしておりました。

父が退院し、少し落ち着いた頃、父と認知症の母がこれから二人きりで暮らすことは難しいと思ったので、父母も東京で一緒に住むことを提案しました。しかし、東日本大震災が起こり、父母は東京に行くのに不安を感じ、ためらっていました。この頃は私の人生で非常に困難な時期でした。私は、無職で何もできない、ちっぽけで無力な弱い自分を痛感しました。そうした中でも、神様が私を安心な場所に導いてくださるとの確信は持っており、神様だけにより頼んで生活をしており

ましたので、心は平安でした。そうこうしているうちに自然エネルギーが見直され、持っていた風力発電の株がどんどん上昇し、五倍ぐらいになりました。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。(2コリント 12・9)

しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなり

ません。恐れてはなりません。(ヨハネ 14・26、27)

主のみこころなら、東京に帰れるようにと祈りました。八月になると、父も東京に行こうと言ってくれましたので、九月には両親と東京に引っ越しをしようと考えておりました。しかし、東京に行く前に三つの課題がありました。一つ目は広島の家売却。二つ目は絶対に東京に行きたくない母を行くように説得する。三つ目は私の新しい仕事を見つけることでした。どれも困難と思える課題でしたが、解決すれば、主のみこころと考え、毎日お祈りいたしました。

広島の家は、二世帯住宅で、購入者がなかなか見つかりませんでした。九月の始めに、なんと自宅の前に住んでいる家族がちょうど二世帯住宅をさがしていることを知り、購入してもらうことになりました。それでも母はかたくなに一人でも広島に住むと言っておりましたが、父が、自分の手術を東京の名医にお願い

するので、一緒に東京に行って看病してくれと頼むと、「仕方がないね」とあっさり了承しました。今までのかたくなな様子はどこに行ったのかと思うほどあっさりしたものでした。

最後の課題である私の仕事についてですが、電気・通信関係に詳しい友人が、LEDの販売を新たにを行うので手伝って欲しいと申し出てくださり、そこで雇ってもらいました。この仕事を通して、以前勤めていた取引先の韓国自動車部品会社と接するようになりました。友人の会社は、半年ぐらいで辞めることになり、韓国自動車部品会社へ転職しました。

その後、父の方は、キリスト集会の方から東海大学八王子病院の名医を紹介していただき、二〇一二年に手術を受け、順調に回復しました。母も、膝の骨折で三回の手術を受けましたが、順調に回復しました。両親は、私たち家族との八か月間の同居生活後、私の妹夫婦といっしょに東京の八王子市で暮らすようになりま

した。

病気といえば、私は私で二〇〇六年に胸腺腫を摘出し、東京医大の呼吸器科にお世話になっていたことがあります。二〇一五年には、年一回の呼吸器科の胸部のCT検査で腎臓にがんがあることが判明し、腎臓がんの手術を受けました。なぜまた病気になったのだろう?と思いました。主を信じて、すべてを主にゆだねましたので、恐れがなく平安でした。腎臓がんは、早期発見とのことで、手術は無事に終わり、痛みがありませんが、主にも主に感謝しておりました。

東京に戻って数年後、以前の会社の同僚から約七年ぶりに電話があり、彼の会社の取引先で通訳をやって欲しいとの依頼がありました。

ドイツのエレベータ部品会社の社長、副社長、取締役が来日し、日本のエレベータ会社を訪問する際、私が通訳をしました。訪問最後の日に、その会社の社長から「当社で仕事をやってみないか」との誘いを受け

ました。私は、今は別の会社に勤めているので、半分ぐらいしかできないと言うと、半分でもよいとの返事でした。思いもかけない事でした。

もし、あのとき、元同僚からの電話がなければ…、元同僚の投資会社がこの時にドイツの会社を手放さなければ…、社長が来日しなければ…、社長が私を気に入らなければ…等、いろいろな偶然のどれか一つでも欠けていたら、この話は成立しなかったはずです。実はこれらはすべて主の必然でした。私は主に導かれるままにドイツの会社でも仕事をするようになりました。その半年後、韓国自動車部品関係の仕事がなくなり、仕事はこのドイツの会社だけになりました。ほんとうに主は、私たち家族のために必要に応じて私に新しい仕事を与えてくださったと心から感謝しました。

私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると

忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。

(ヤコブ 1:2-3)

二〇一四年、十九歳になった長女の友理恵が救われました。後は、長男、次男と両親と家内の母ですが、最適な時に主が皆を救ってくださると信じております。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

(使徒 16:31)

腎臓がんも手術から二年がたち、転移も再発はありませんが、今度は、前立腺肥大の病気が与えられました。仕事は順調に進み、少しずつおごり高ぶっていたのかも知れません。

二〇一七年七月頃、父が肺炎で再入院し、父、家内、私の三人で、初めて病室で一緒に祈ることができました。また、母のデイサービスに行き、こちらでも初めて母

と家内とともに祈ることができましたので感謝です。

もうすぐ退院できそうでしたが、またかぜをひき、また肺炎になってしまいました。町田キリスト集会の皆さんに病室でお見舞していただき、ともに祈っていただきました。聖書の言葉のカードもいただきました。この頃から、父にとってイエス様を信じるのが、今もとても大切なことと思わされておりました。

それは、信じる者がみな、人の子にあつて永遠のいのちを持つためです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネ 3:15-16)

十月十九日に、危篤となり、皆で病院に駆けつけました。車で病院に行く途中から、「父が救われるには、

父がイエス様を信じること」とのことばが繰り返し頭に浮かんできました。家族で病室について、父に私がわかるかとたずねると、うなずいてくれましたので、私のことはわかると確信しました。そこで、自然に父に「イエス様を信じる？」と尋ねましたところ、うなずいてくれました。「イエス様を信じたら、天国に行けるね」と尋ねたところ、またうなずいてくれました。

この時、私は、父が救われたと確信いたしました。今まで、何度もイエス様について、話をしておりましたが、父は、真言宗でかたくなでした。しかし、人生の最後の最後で主イエス様を受け入れてくれました。父はその後、少し持ち直しましたが、十月二十三日に病室を訪ねると、酸素マスクをして大変苦しそうな様子でした。私達夫婦には、父が救われたとの確信がありましたので、父に「今まで長い間いろいろありがとう、いろいろ迷惑をかけてごめんなさい」と言って、別れを告げました。すると父の右目に涙がにじみました。父

はわかってくれたのでしょう。家内も「イエス様が今もこれからもお父さんのそばにいてくれますよ。これから一番良いところに行くからね」と声をかけると、父はうなずいてくれました。感謝です。翌二十四日の午前四時頃、父は天に召されました。二十八日に行なわれた通夜に町田キリスト集会の皆さんが来られ献花をしていたことは感謝でした。

今後は、残された九十歳の母、妻の母、長男、次男、妹夫婦の救いが必要と主に祈っております。今年（二〇一八年）の一月、母は、東京八王子の妹の家から、私たちの家に二泊三日で宿泊することになりました。家で母との語らいの中で、天に召された父の話になりました。私が「父は、天国に行っているよ」と言うのと、母も「そのうち、天国に行きたい」と言いましたので、「イエス様を信じたら天国にいけるよ」と言いました。すると、母は「私もイエス様を信じたい」と言いましたので、母、家内、私の三人で、母がイエス様を信じ

ることができるようにと祈りました。母の救いも主のお約束ですので感謝です。

今後、主だけを見上げ、主だけにより頼んで、主だけに従って日々を過ごせますように、たえず祈っていきます。

いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい。すべての事について感謝しなさい。（1テサロニケ 5:16-18）

高幣 信彦（たかへい のぶひこ）

一九五三年 広島市生まれ、ミシシッピ州立大学大学院航空宇宙工学修士（MS）、マツダ株式会社、ベントラー・オートモーティブ株式会社を経て、現在、Wittur Japan代表

家内 なおみ

長男 恵寛（よしひろ）

長女 友理恵（ゆりえ）

次男 恵治（けいじ）

